



elephant village

photos and written by a dog

象が好きだ
あのゆったりと歩くすがた
時の流れをこえて何もかも知ってしまったというような目と体のしわが
とても好きだ

ラオスを旅してた時、「象祭り」があることを聞いた
聞いたことも、持っていた本にも書かれていない村の名前だった
人に聞きながらその村にむかった

バスは1日に1本 夜行で12～3時間だった
座席と座席のあいだに古いバスから取ってきた座席を
更にところどころつめ込み前後のスキマが限りなく狭い
膝が動かせない

通路には小さな丸いプラスチックのイスを入れていく
私は2人用の座席に3人で座っている

おしりが感覚をなくし、一晩中しびれていた



山を越え 川を越え



バスがとまった場所はまだその村じゃなかった

そこからトラックで5～6時間 山や村をこえていく

その村に着いたとき、私と私の荷物は大地と同じ色をしていた



ひどく乾燥した大地で、砂ぼこりがたたないよう村の人々は一日になんとか水をまいていた

ホテルというものはその村になく、村人の家に泊らせてもらう



その家は食堂をされていて、ごはんが今までで一番美味しかった

家族は英語を何も知らない
こどもや女性たちがしてくるジェスチャーと言葉を覚えていった

ためてある水をおけですくい3度頭からぶっかける
でも外を歩くとすぐに体は茶黄色にもどった



festival の前日、各家の前に大きなバナナの葉を植えていく

周りの村からやってくる象や部族の人びとへの歓迎のしるしだと誰かが言っていた

当日 会場という名のただっ広い広場に色々な部族の人たちが
それぞれの衣装 おどり 音楽 みこしをかかげ入ってくる



そして カラフルな衣装にペインティングされた象たちが広場に入ってくる



いくつかの象は穏やかな表情をし

いくつかの象は悲しそうな 怒っているような目をしていた



耳がピンとはっているものは10歳以下だと誰かが教えてくれた

若い象も年老いた象も 小さい象も大きい象も
なにか超越した個々を感じる



仙人のような 全てを知っているような目を持っている

神様に象の形をしたものがあるのがなぜだか分かるような気がした



象の水あびが見られる場所に来た

象たちが水あびをしている後ろのほうから子どもたちも水あびしはじめる



そのまま象のほうにはやってこない

大量の象のフンがこちらで浮かんでいるのを知っているからか

他の家に泊まらせてもらっている芸術家が 自分の家のシャワーはここだ、 と言っていた



日が暮れると民族衣装のショーが行われ、 花火があがった



毎晩のように母に腕をとられ 夜の祭りに参加する

子の友だちや母の友だちたちに話しかけられる

英語ではないのだけれど、どうやって会話をしたかわすれてしまった

他の旅人たちからも不思議がられたのだけれど、どうやったのだろう



次の日も象たちは歩く

象たちの会話はよく鼻を使う



よく鼻で握手をする

頭をなでたり 口に食べものを運んであげたり

彼らの鼻は唯一のuseful な鼻というより手だと思う



ある場所では象たちが芸をしていた

イギリスから来た女性は象が見せ物のように使われているのがいやで、
タイの動物園ではない傷ついた象の保護機関でボランティアをしたと言っていた

動物園はたしかに人間のためにある
動物たちにメリットなんてないようにも思える

どうして私たちは動物を見るために人が造った囲いを訪れるのだろう

人が入ってはいけないうちの自然区域に入りすぎるよりはましなのか

もし、全ての動物と会話できたのなら
動物を尊重しながらどんな生活をしているのか
じゃまにならない程度に彼らの生活を
ほんの少しのぞかせてもらったりできたかもしれない

小さかった自分は動物園でいろんな動物をぼーっと見て何を思ったか
覚えていない



このとき披露された芸は、芸というより
人間との共存 一家のはたらきものとして
必要な動作や仕事っぷりだった

どうやって象に乗るか 降りるか 丸太の運び方 etc



こがらな若い女性が獣医としてけがをした象たちの治療にかけ回っていた

他国からhelpにきた経験のある獣医が彼女を指導していた

人が押さえつけるには限界のある嫌がる象たちを
象やけがの状態と折り合いをつけながら 1つ1つ真剣に治療していく

動物を救いたいという人たちがこんな風に動物とむかい合い
治療できるという環境が日本にももっとあればいいなと思った



この村は各々の家で各々の役割をはたしている

ある家は象を飼い ある家は織物をし ある家は料理をだし ある家は果物を売る



他の村へ行くには山を越えていく

歩く人もいれば 象に乗る人もいれば トラックを使う人もいる

だが ひょいとすぐそこまで、というわけにはいかないので
村全体で生きていけるようなコミュニティになっている



象が家族の一員である家では 象とその家の人びととの距離が近い

犬や猫が家族にじゃれつくように象もじゃれついている



人間より大きいし 強いし 頭だってよいであろう象は
なぜその慈悲深い目で人に従うのかわからなかった

そして象がこんな風に人と心を近づけることができることも知らなかった



村滞在最終日の夜、私の家族は 私と他に泊まっていた旅人たちに
これからの旅の安全や健康のためにお祈りをしてくれた

父は何枚もの大きなバナナの葉を持ち帰り
祖母とおばがそれらで供え物をつくる

母も初め挑戦するがうまくできない様子で
祖母が美しくスムーズにつくりあげていく

祖母の手の、しわの美しさに見惚れた



母は今夜の宴にと 数匹しかいない鶏をしめてくれた

その晩 お祈りのために親戚中が集まり
私の両手首にはたくさんの祈りの紐がまかれた

宴と祈りの酒をことわるすべも理由ももたず
回し飲みの酒を飲む

すぐに頭がゆれ立ち上がれなくなり
けっきょく家族と良き友となった旅人たちからとても心配された

かかえこまれながらなんとか入り込んだ布団の中で
心が温かくて泣きそうになる夜をすごした

別れの日、家族がハンドメイドのおそろいのスカーフを
ものすごい量のお弁当とともに私たちにもたせてくれた

みなそれぞれ自分たちの旅を再開した

ラオスの米はどの米よりも美味しいと思う

1ヵ月後、カンボジアのシェムリアップのある食堂でみんなと再会した

まるで呼ばれていたかのようにみなたった今ここについた、と言う

その時もとてもとても温かい時間だった